寶榮座仏教講座　第５回　　令和３年８月28日（土）
講師：佐藤一道　　14：00～16：00　寶榮座

１．　中国仏教史

1-1　はじめに

中国において、仏教はインドからの外来思想である。中国仏教は、儒教・道教など様々な中国思想との交叉のもと、特に翻訳を通じて受容され、体系化されていった。

1-2　インドから中国に仏教が伝わるときの二つの障害

・地理的な障害・・・山脈と砂漠と遠く離れた距離
・文化的な障害・・・インドと中国は古くから高度な文明が栄えた

1-3 中国仏教史の時代区分

（鎌田茂雄著『中国仏教史』第１巻　1982年　東京大学出版会　P70～　）

第１期　初期翻訳時代　仏教伝来から東晋まで
第２期　準備育成時代　鳩摩羅什から南北朝末まで
第３期　諸宗成立時代　隋（581～617）・唐（618～907）時代
第４期　同化融合時代　宋代以後

第１期　初期翻訳時代（中国への仏教の流入）

・仏教の初伝は紀元前後の漢時代

・この時代の翻訳者は、安世高（あんせいこう）、支謙（しけん）、竺法護（じくほうご）など西域から来朝した渡来人。

・彼らが訳出した経典は、上座部仏教（小乗仏教）や初期大乗仏教の経典。

・老荘思想によって仏教を理解する「格義仏教」を生み出した。

第２期　準備育成時代（中国仏教の開花）

・漢が滅亡（200年）から隋の成立（618年）までの約400年間

・非漢民族国家の成立などにより、儒教の権威が衰退

・外来の仏教が中国に受容される精神的土壌が育成された

・知識人による哲学的な仏教が開花

・慧遠（334－416年）が、中国人として初めて仏教教団を組織

・中国仏教を受容の時代から成長の時代へと転向せしめたのは鳩摩羅什

・鳩摩羅什の後に様々な学派や宗派というかたちで中国独自の仏教が開花

・仏教を奨励した南朝の梁の武帝（502年即位）

・達磨が禅を伝え、中国独自の宗派・禅宗として、以降もっとも長く栄えた

・教相判釈の発展

・経典の注釈書の執筆。次の「諸宗成立時代」への準備となる仏典の翻訳、経論の盛んな研究がなされた

第３期　諸宗成立時代　（中国仏教の成熟）

・玄奘（602－664年）の活躍。76部1347巻を翻訳

・法相宗、華厳宗、浄土教、北宗禅など成立

・翻訳者たちの尽力によって、この時代までに主要な経典が中国へと伝えられた
（ しかし、インドでの経典の成立順序と異なったかたちで膨大な量の経典が伝えられたため、 中国の人は経典内に説かれた学説の整合に苦心した。そこで生まれたのが「教相判釈」と呼ばれる中国仏教独自の経典把握方法）

・唐代に多種多様な仏教思想や文化が成熟し、中国仏教の最盛期

・安史の乱（755－763年）やその後の仏教に対する弾圧で以後、衰退の一途をたどった

隋唐代は中国仏教の諸宗派が成立した時代。
・インド関連の中国仏教・・・三論宗、律宗、法相宗、真言宗
・中国独自の学問仏教・・・・天台宗、華厳宗
・中国独自の実践仏教・・・・三階教、禅宗、浄土宗
（日本の仏教各宗派はほとんど中国の隋唐仏教の影響を受けて成立している）

第４期　同化融合時代　（中国仏教の浸透）

・儒教、仏教、道教の三教が同化融合　仏教の土着化

・安史の乱によって国家の庇護を失った中国仏教は、自給自足の必要も生じ、特に実践的な傾向を強めていった

・宋代以降は、実践を重視した禅宗と民衆に分かりやすい浄土教を中心に発展

・元・明以降は一時的にチベット仏教の流入と隆盛があった